

空港臨海部グランドビジョン2030の改定について

I 改定の方針

1. 改定の背景・目的

平成22年3月に「空港臨海部グランドビジョン2030（以下「ビジョン」という。）を策定後、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催決定や羽田空港の再拡張・24時間化、羽田空港跡地の開発等、空港臨海部を取り巻く状況や、国内経済状況の変化さらには国際都市間競争が激化といった社会経済情勢が変化してきた。この状況に対応ができるまちづくりを目指すため、ビジョンを改定する。ビジョンの改定により2040年の空港臨海部の将来イメージを再構し、将来像の実現に向けた具体的な事業を推進していく。

2. 検討体制

- ・空港臨海部グランドビジョン専門部会
学識経験者4名、区職員2名
(まちづくり推進部長、産業経済部長)で構成
- ・空港臨海部グランドビジョン2030改定庁内検討委員会
まちづくり推進部長、産業経済部長を筆頭に
庁内関係職員13名で構成



3. 検討範囲

埋立島部及び港湾区域に隣接した地域を「臨海部」とし、ビジョンの検討範囲を、埋立島部（平和島、東海、昭和島、京浜島、城南島）、内陸部（大森本町、大森東、大森南、東糞谷、羽田旭町、羽田の各一部）、羽田空港、中央防波堤埋立地の2割とする。
また、検討範囲は、改定作業中である都市計画マスタープランと整合性を図るものとする。

4. 改定の手順

2040年の空港臨海部について、バックキャスティング手法（※）により検討を行う。

STEP1: 臨海部の目指すべき姿(将来像)について検討

- ・地理的状況や統計指標、開発動向等から空港臨海部の特質・強みを把握する。
- ・将来の技術革新、まちづくりの動向を把握する。
- ・上記2つの事項から将来のまちづくりの動向を捉え、強みを伸ばさせ成長できる臨海部として目指すべき望ましい姿（将来像）について、検討する。

STEP2: 将来像実現に向けたプロジェクト検討

空港臨海部の将来像を実現させるための基本方針・分野別方針を設定し、将来像と現実のギャップを埋めるためのプロジェクトについて検討する。

STEP3: ロードマップ検討

検討したプロジェクトについて、2040年をゴールとして、短期的な期間で取組むこと、中長期期間で取組むことに仕分けし、ロードマップを作成する。
※バックキャスティング手法: 将来像を先に設定しておき、そこから振り返り、現在すべきことを検討する手法

5. 検討スケジュール

| | 4月～6月 | 7月～9月 | 10月～12月 | 1月～3月 |
|-------------------|----------------------------|-------------------------------------|---|--|
| 令和元年度 (2019年度) | ・検討準備 | ・改定の基本方針 ・現状、将来動向、※アソシ ・将来像など | ・現状整理、将来動向、※アソシ ・将来像、基本方針 ・プロジェクトアライアンスなど | ・将来像・基本方針 ・将来都市方針図 ・プロジェクトアライアンスなど |
| 令和2年度 (2020年度) | ・分野別方針 ・課題の抽出 | ・課題の抽出 ・プロジェクトアライアンス ・ビジョンの構成 | ・プロジェクトアライアンス ・ロードマップ ・ビジョン（素案） | ・ビジョン（素案）策定 |
| 令和3年度 (2021年度) | ・パブコメ ・ビジョン（案） 委員会報告 | | ・ビジョン策定 | |

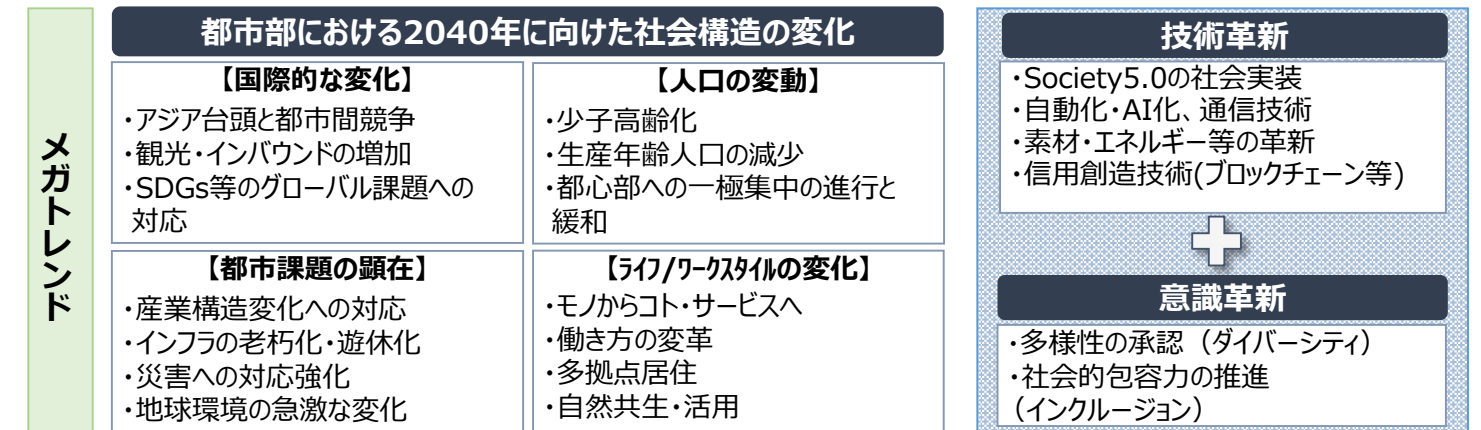
II 検討の内容

1. 空港臨海部の持つポテンシャル

| 空港臨海部の強み | | |
|---|--|---|
| 産業特性 | 立地特性 | 都市資源 |
| <ul style="list-style-type: none"> ■ オンリーワンのものづくり ■ 都市付近にある工業専用地域という希少性 ■ 新たな開発可能性のある土地の存在（中央防波堤埋立地） | <ul style="list-style-type: none"> ■ 顧客との近接（交流や物流の適地） ■ 世界との近接（羽田空港、東京港） | <ul style="list-style-type: none"> ■ 希少な自然資源・観光資源の存在 ■ 多重の交通手段の存在 ■ 物流、防災拠点機能の存在 |

2. 都市部における2040年の将来動向

空港臨海部の都市部における2040年の将来動向について、メガトレンド、産業・都市・ライフ/ワークスタイルの変化がもたらす機会について以下のとおり整理した。



産業分野における機会

■ 自動化の進展等による産業再編

- ・自動産業：スマートファクトリー化
- ・高付加価値産業：卓越した技術・能力による高度加工や、機械に代替できない能力（新製品・新技術の創出等）の必要性
- ・補助産業：食・水・エネルギー等生産

■ 企業価値向上による、新市場への進出機会の獲得

■ 自動ピッキングシステム等によるロジスティクスのオートメーション化

■ 匠の手作業による高度加工

都市インフラにおける機会

■ 国際的な商流・物流が拡大

■ 新技術導入による移動・コミュニケーションの円滑化

(自動運転、MaaS、遠隔会議、自動通訳等)

■ 大規模災害時のライフライン・BCP強化

■ ソフトインフラ（デジタルコミュニティ、法律・規制緩和等）の整備

■ MaaS

■ 大容量バス

ライフ/ワークスタイルにおける機会

■ 人生100年時代における生涯活躍の場の拡大

■ 誰でもどこでもいつでも働ける環境が形成

■ 都市と自然との共生：自然の価値向上

■ 人生100年時代のキャリアイメージ

■ 多拠点生活支援サービス

3. 空港臨海部の目指すべき方向性

空港臨海部の持つポテンシャルと2040年の将来動向から空港臨海部の目指すべき方向性を整理した。

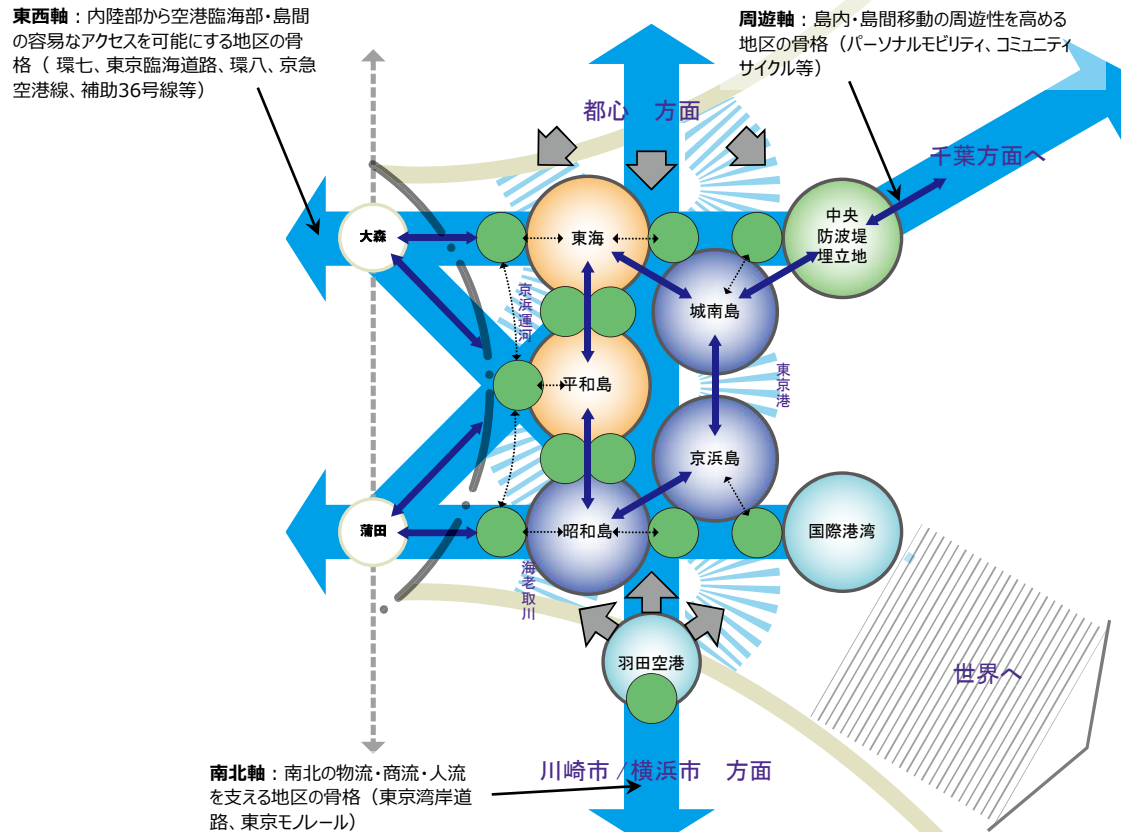
| 空港臨海部の目指すべき方向性 | | |
|---|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・既存の技術・ノウハウを生かしながら、次世代の高付加価値産業（製造装置・産業機械、医療・介護、環境・エネルギー・循環、自動車等）への参入が進み、産業が拡大している。 ・研究開発、試作製造、実証実験等を空港臨海部で展開可能で、新技術の社会実装に挑戦できる場となっている。 | <ul style="list-style-type: none"> ・交通ネットワークが更に拡充され、物流適地としての価値が高まり、都心における高度物流網の一翼を担っている。 ・人材、技術交流（技能研修、業務連携等）や、世界の製品開発・試作現場となっている。 | <ul style="list-style-type: none"> ・空港臨海部で働く人や訪れる人（区民・都民、羽田空港利用者等）にとって、アクセスしやすく、自然・観光資源を活かした魅力的な就業環境や観光拠点が形成されている。 ・大規模災害時の水・食料・エネルギーの備蓄・生産基地、復旧・復興基地となっている。 |

4. 空港臨海部の将来像(案)

空港臨海部の2040年における将来像のイメージとキャッチフレーズを以下のとおり整理した。

(仮) ひらめき・ときめき、新たな出会いと発見がある世界の玄関口おおた

研究開発・ものづくり、遊び・アートなどの「ひらめき」、レジャー・観光、働くことなどワクワクする「ときめき」があり、区民・来街者・働く人にとって「新たな出会いの場」、「驚きと発見・新たなものが生み出される場」がある“世界の玄関口おおた”



開発、生産、廃棄・再生産の全工程において、卓越した技術・能力を有する技術者が全国・世界各国から集い交流・挑戦し、高い付加価値を生み出す場となっている。

都市部において貴重な自然資源（緑・川・海）やスポーツ・アート拠点として区民にも都民にも親しまれるエリアとなっている。

道路インフラのみならず、高次物流倉庫機能や先端技術を活用した交通網が高度に発展し、東京湾岸の物流幹線網の一翼や、内陸部との交通網を担う。大規模災害時には、復興を支える軸線となっている。

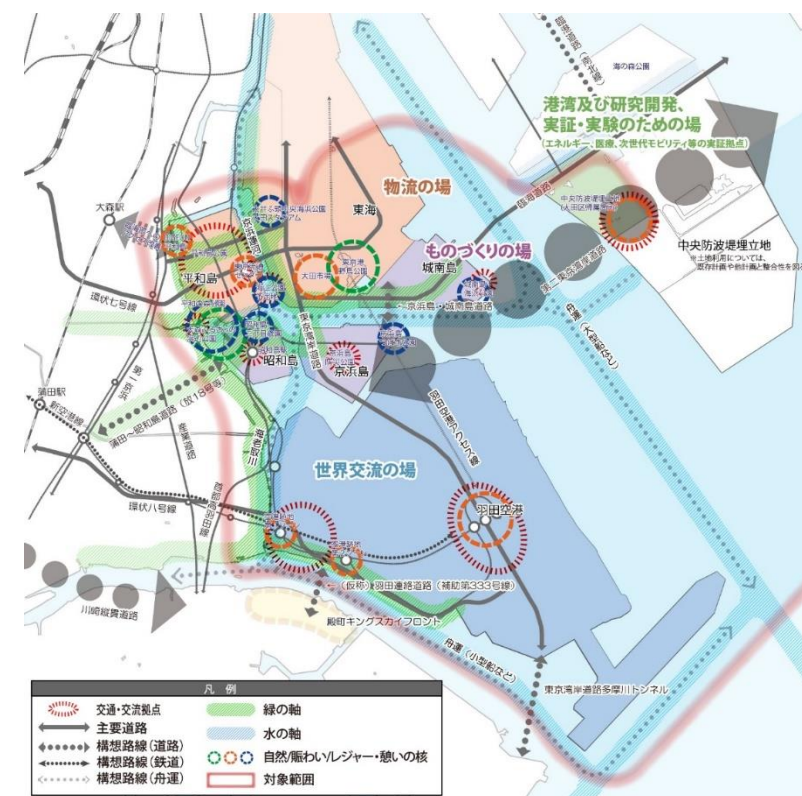
5. 将来像実現に向けた基本方針(案)

空港臨海部の将来像の実現に向けた基本方針を「高度な産業の集積拠点」「人の活動と自然の調和」「次世代のインフラ整備」の3つに整理した。

| 基本方針① 高度な産業の集積拠点 | 基本方針② 人の活動と自然の調和 | 基本方針③ 次世代のインフラ整備 |
|---|---|---|
| <p>空港臨海部の技術者と国内外の多様な技術者が交流し、協調・競争を通じて新たな価値を創出する高度産業の一大集積拠点を形成する</p> <p>■分野別方針 (産業)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 製造業をはじめとした特有の高い技術力を活かす企業の成長促進 ● 最先端技術を活かし、新たな挑戦を試みる企業誘致・育成 ● 内陸部・都心エリアや海外との連携や、ベンチャー企業等との交流・協業・挑戦の促進 <p>(土地利用)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ものづくりを主体とした土地利用転換促進 ● 研究開発、試作製造、実証実験などの機能を促進する土地利用誘導 | <p>希少な公園、緑地、水辺空間を活かし、働く人や来街者に憩いとインスピレーションをもたらす、産業・観光レジャー・自然が調和したまちを実現する</p> <p>■分野別方針 (自然環境・レクリエーション)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 都心における希少な公園・緑地・水辺を活かし、多様なアクティビティを体験できる賑わいある空間の創出 ● エネルギーのスマート化による低炭素・脱炭素の推進 <p>(観光)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「食」や「産業資源」等の観光コンテンツの活用 ● 舟運等による新たな観光ルートの形成と羽田空港利用者の取り込み | <p>陸・海・空における次世代の交通・物流インフラ及び交流のソフトインフラが整備されるとともに、災害時における復旧・復興拠点を担う</p> <p>■分野別方針 (交通)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 空港臨海部と近隣道路ネットワークの再構築・強化 ● 最新技術（自動運転等）を活用した公共交通サービスレベル、配送サービスの向上 <p>(防災)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 大規模災害時に備える復旧・復興拠点の形成 ● エネルギー自給率の向上と大規模災害時のBCP強化 <p>(ソフトインフラ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 交流・協業を円滑化するビジネスコミュニティの構築 ● 新技術の社会実装を加速する法整備・規制緩和 |

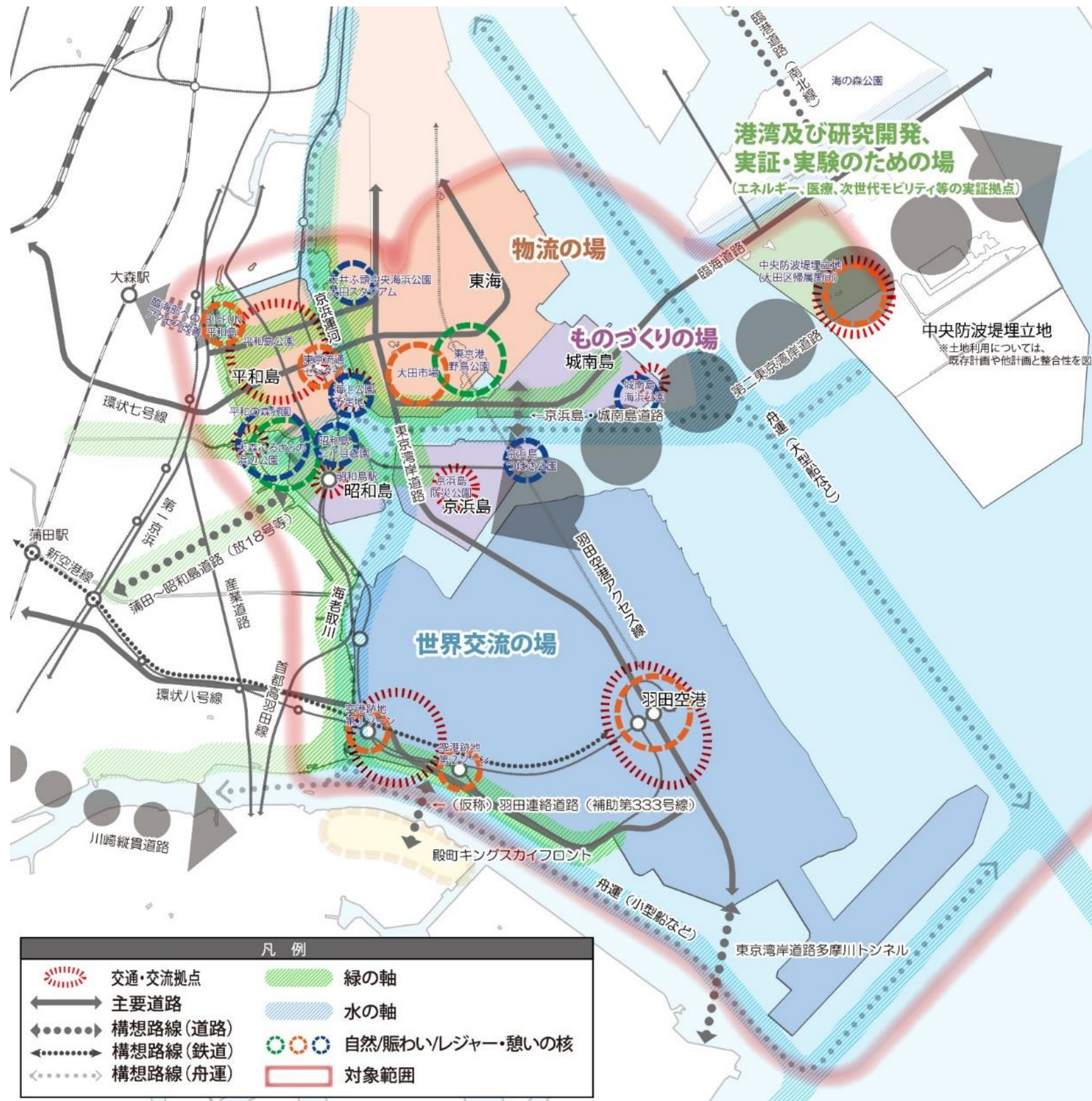
6. 将来都市方針図(案)

将来像実現に向けた基本方針を公園・市場・レジャー施設等を「拠点」「核」、道路・鉄道・緑道・川・運河等を「軸」として位置付け、将来都市方針図として整理した。



- 【自然の核】
東京都市部近傍にありながら、貴重な自然環境に身近に触れることができる公園を自然拠点として位置づける。
- 【賑わいの核】
働く人、訪れる人双方にとって楽しく過ごせる魅力ある新しい賑わいの拠点を位置づける。
- 【レジャー・憩いの核】
スポーツ施設の集積や、水辺近接の公園をレジャー・憩い拠点として位置づける。
- 【交通・交流拠点】
内陸部～埋立島部や島部間の移動円滑化並びに人々の交流の拠点として、主要な交通結節点や公園等の公共施設、民地であってすでに将来的に交通結節点としての立地ポテンシャルのある場所を対象に、交通・交流拠点を設定する。
- 【緑の軸】
内陸部～臨海部を連続的な緑でつなぐ軸
- 【水の軸】
内陸と埋立島部、埋立島部間水面を連結する軸。

将来都市方針図(案)



「**緑の軸**」内陸部～臨海部を連続的な緑でつなぐ軸
 ...内陸河川(内川)や呑川緑道、平和の森公園

「**水の軸**」内陸と埋立島部、埋立島部間水面を連結する。(舟運ルートと一致) ...海老取川、京浜運河等

| 自然の核 | 賑わいの核 | レジャー・憩いの核 |
|--|---|--|
| | | |
| <p>東京都市部近傍にありながら、貴重な自然環境に身近に触れることができる公園を自然拠点として位置づける。</p> <p>自然の核では、現在ある良好な資源(例: 浜辺の親水性や野鳥観察など)の保全を重視した活用を図る</p> | <p>働く人、訪れる人双方にとって楽しく過ごせる魅力ある新しい賑わいの拠点を位置づける。</p> <p>賑わいの核では飲食・物販等の店舗に加え、イベントなど賑わいづくりのイベント等も開催される、トキを過ごすことを楽しむ場である。ホテル等の滞在機能も付加し、臨海部観光を後押しする</p> | <p>スポーツ施設の集積や、水辺近接の公園をレジャー・憩い拠点として位置づける。</p> <p>レジャー・憩いの核では、臨海部ならではの広々とした空間や水辺との近接性を十分に生かした、内陸部では得難いスポーツ体験や、レジャーを来訪者に対する提供を後押しする</p> |

交通・交流拠点

【交通・交流ハブ拠点について】

- 内陸部～埋立島部や島部間の移動円滑化並びに人々の交流の拠点として、
 - 主要な交通結節点や公園等の公共施設
 - 民地であってすでに将来的に交通結節点としての立地ポテンシャルのある場所
 を対象に、交通・交流拠点を設定する。
- 交通・交流拠点では、立地ポテンシャルに応じて、段階的な交通結節機能を導入する。(バス・タクシー等のターミナル機能やレンタサイクルポート等)